番組：「国際養子縁組　暗躍するブローカー」を見て

先に当ＨＰ記事で触れた書籍「赤ちゃんの値段（「雑学ＢＮ」の書籍等読後感関係（Ⅳ）、2007.10.16.：参照）」の中で、国内外の養子縁組の斡旋の闇の部分にも触れられていたが、タイミングよく「国際養子縁組　暗躍するブローカー」と題する海外番組があることを知り、もちろん視聴した。

インドネシア人の未婚の女性が予期せぬ妊娠で生まれた赤ちゃんが、仲介者の口利きで仕事で滞在中のアイルランド国籍の夫婦と養子縁組したが、養親に実子が生まれ、２才になった養子の子どもが養護施設に遺棄された。
その子どもは既にアイルランド国籍であり、インドネシアの子どもとしての権利が保護されず不法滞在として国外追放になりかねず、この現実をアイルランド本国で報道した女性ジャーナリストが、斡旋に疑問を感じて再びインドネシア国内で追取材する姿を追うものであった。

斡旋ブローカーに近づいての取材、その取材が契機となり警察の捜査、ブローカー組織の逮捕、子どもの行く末を思ってのビラ配りやラジオ放送での呼びかけ等での実母捜し、実母を捜し当てての斡旋に至る経緯取材、実母と子どもの再会、等々のシーンで構成されたドキュメンタリー番組であった。

このジャーナリストの取材から、ブローカー組織は、賄賂、公文書偽装等々で、行政や関係機関の中にも深く入り込んでいたこと、また、後進国と先進国の子どもを取り巻く環境の格差の問題も明らかになっていく。
需要があるから供給しようとし、そこにお金を儲けようとするグローカー組織が生じる余地があるのだろう。
子どもが生まれる前から、妊娠で戸惑う女性に「産んでも大丈夫！　子どもはいい人に貰ってもらって、幸せになるから！」と声がけする病院の看護師等を含むブローカー組織のチームワークの存在に、寒気がする。

先の書籍「赤ちゃんの値段」にあったが、日本では養子縁組の法整備は整っていなく、まず、斡旋事業所は行政の認可制でなく届け出制であるが故に、公式に届けている事業所はわずか８ケ所で、記者の取材からだけでも無届けの事業所は２０以上あり、２０００年度からの３年間で養子として海外に行った日本の子どもは、１０６人以上でないかと云う。
また、こうした養子斡旋の中には、５００万円近い金額が動くこともあるとか。

日本は一日も早く、「（国際養子縁組等に関する）ハーグ条約」を批准する真の先進国になってもらいたいものである。

阿部幸泰　　（2007 年 10 月 27 日　記）